

日本体育学会体育哲学専門領域 2018年度 第2回定例研究会のお知らせ

日本体育学会体育哲学専門領域では、今年度二回目の定例研究会を、2018年12月8日（土）に下記の要領で開催いたします。なお、研究会終了後18時より懇親会を予定しております。ぜひともご参集ください。

- 日 時：2018年12月8日（土）15：00～17：30
- 会 場：日本体育大学 世田谷キャンパス 2205 教室
〒158-8508 東京都世田谷区深沢 7-1-1
- アクセス：東急田園都市線 桜新町駅下車 徒歩 15 分程度 バス 5 分程度
東急大井町線 等々力駅下車 徒歩 25 分程度 バス 10 分程度
- アクセスマップ：<http://www.nittai.ac.jp/access/tokyo.html>



発表内容（予定）

【発表①】 照屋太郎（日本体育学会神奈川地域）

無心に依る体育—その方法—

幼子は母に抱かれ幸せで居る。例えば幼子の母を求める心を古来、無心、本心と呼ぶ。

体育は身体活動や身体運動を媒介とした教育である。教育では学習者が己を学ぶ事を教師が助ける。己はどう生きたい存在か、己を学ぶ事は本心を学ぶ事である。

学習者が無心、本心に成り教師はどうすれば体育—学習者の己学び—が成立するか。この問題の答を明らかにする事が、本研究の目的である。

本研究は古い文献と筆者の経験事実に基づく。体育が学習者にどう起きるか、を考える。そして学習者を支える教師の在るべき様を考える。それが本研究の方法である。

【発表②】 荒牧亜衣（仙台大学）

聖火リレーの記録と記憶：1964年東京大会関連資料を対象に

IOCがレガシーということばに計画的かつ肯定的な意味合いを戦略的に付与したことにより、この概念は、オリンピック競技大会を招致する都市が開催意義を示す際の必須要件となった。また、石坂（2018）も指摘するように、IOCによって価値づけられたレガシーは、過去のオリンピック競技大会をも再考する概念として拡張を続けている。この拡張は、オリンピック競技大会が「もたらしてきたもの」や「もたらすであろうもの」を曖昧にはしていないだろうか。本発表では、以上の問題意識から、1964年東京大会の聖火リレーを対象に、その記録から大会がもたらすものについて明らかにする。

【発表③】 釜崎 太（明治大学）

スポーツにおける社交の可能性—ジンメル『社交の社会学』精読—

世紀転換期のドイツを生き「生の哲学」者ゲオルグ・ジンメルは、ふたつの意味で革新者であった。ひとつには、「科学として認められない」（『社会学の根本問題』）社会学の必要性を訴え、ウェーバーやテニースらとともに、ドイツではじめてとなる社会学者会議を開催し、「社交の社会学」という基調講演をおこなっている。ふたつめに、愛国主義が蔓延する第二帝政期のドイツにおいて、敵国文化と批判されていたイギリス生まれのスポーツを、ジンメルは日常的に実践し愛好していた。当時はまだ蔑まれていた自転車に乗って半ズボンで大学に出校し（Landmann, E）、自宅にテニス場を作って社交を楽しんでいたのである（Simmel, H）。本報告では、ジンメルの革新者としての主張を読み取ることができる講演録『社交の社会学』（1910年）の精読を通じて、そのスポーツ批評としての可能性を論じたい。

【発表④】 佐藤 洋（明星大学）

「2018 IAPS in Oslo, Norway」参加報告

発表者は、今年9月にノルウェー・オスロで開催された国際スポーツ哲学会（IAPS）に参加し、はじめて英語による口頭発表を経験した。タイトルは博士論文の一節で論じた議論を使い、「Understanding the State of Virtue of Athletes: What is Kazuyoshi MIURA's virtue?」とした。今回の発表では、口頭発表までの準備や発表後にいただいたアドバイス、またノルウェーまでの道のりやオスロ体験などを紹介し、学会大会参加の報告としたい。